



西部航空方面隊オピニオンリーダー  
須河信子

国道10号線をひたすら北上。時間にして40分ぐらいだろうか。私の住んでいる宮崎市から新富町にある新田原基地を目指す。

まだ梅雨も訪れていないのに、フロントガラスを突き刺す光は初夏のそれだ。道路の両脇の緑が日増しに色を強くしている。

到着時刻がお昼に近いと、佐土原あたりにさしかかったところから飛行機の音が聞こえてくる。訓練に出ていたF-4やF-15がパイロットの昼食のために基地に帰って来るのだ。

頭上に戦闘機の音を聞きながら、私はこれまでに会ってきたパイロット訓練生やパイロット諸氏のことを思い出す。

私が新田原基地にご縁をいただいたのは2002年のこと。かれこれ13年のお付き合いになる。当時の私はパニック障害に悩まされていた。誰にも会いたくない。どこにも行きたくない。そんな私だったが、唯一行きたいと思ったのが新田原基地だった。

当時お世話になった隊司令はあの頃の私のことを、後年、このようにおっしゃった。

「この人は、肉弾戦やったんよ。頭から突っ込んで来よったわ」

私は暇を見つけては新田原基地に通った。そしてずっと訓練機の離発着を眺めていた。数ヶ月して気が付いた。彼らは自分に負けたら墜ちる。しかし、私は倒れても地面の上だ。

私のパニック障害は徐々に快方に向かい、今では寛解にまでなっている。過呼吸、動悸、めまいが怖くて外出できなかつた私が、通常の生活ができているのだ。

医師は最初私を診察した時「廃人になる」と思ったそうだ。あのまま外出する勇気を得られないでいたら、たぶん私は廃人になっていたことだろう。

元気になった私はパイロットの成長過程を書こうと思った。たまたま知ることのできた事実だ。一般の社会に伝えたい。防府北、芦屋、浜松と取材を重ね5回連載で私は『Base Nyutabaru』というエッセイを文芸同人誌に掲載した。ここでいささか、特定の思想をお持ちの皆さんとの摩擦があったが、それも何とか乗り越え、私は益々強くなってしまった。

戦闘機のライセンスを取得し全国各地に配属されて行く卒業生を微笑ましくも、頼もしくも思い、何度も見送った。彼らは上気した顔で喜びを表していた。

一方、若いパイロットを育て上げ、自分たちは戦闘機を降りるパイロットたちもいる。世代交代ではあるのだが、私は彼らのラストフライトを胸の詰まる思いで見ている。

彼らにも上気した顔でライセンスを受け取った日があった。そして部隊に配属され、対領空侵犯措置の任務を遂行した。ブルーインパルスに所属していたパイロットにも、教導隊に所属していたパイロットにも等しくラストフライトの日がやって来る。

ラストフライトを無事に迎えられるパイロットは、まだ運がいい。航空身体検査で異常が発見され、実は前回のフライトが自分のラストフライトであったのだ、と知らされるパイロットもいる。ある時、突然、飛行停止を命じられるのだ。

彼らは非常に高い自己管理能力で病気を克服し、通常の生活に戻るのだがそれでも時々、ぼつんと、

「飛びたい」

と言う。一体、どんな空を見てきたのだろうか。私はそれが知りたい。

新田原基地の警衛所で、訪問部署を告げる。

F-4 の音が聞こえる。F-15 の音が聞こえる。みんな元気に飛んでいる。匂を搭載した飛行機がスピードを緩めながら、滑走路を捉える。

~ユズリハ~

